

4 参考資料

(1) よくある質問Q & A

Q 1 1年間で、活動プログラムの全ての活動に取り組まなければならないのですか？

A

活動プログラムは、1年間で全ての活動に取り組むことが望ましいです。今回、活動プログラムの授業を行った学校は、6月末から11月初めの間で実施しています。しかし、学校の実情や児童生徒の実態によっては、活動プログラムの全ての活動に取り組むことが難しい場合があります。

そのような場合は、学校や児童生徒の状態に合わせて、例えば、中学校1年生で「①怒りについて知る」の活動に取り組んでおき、2年生で「②トラブル未然防止のスキル」と「③トラブル解決のスキル」の活動に取り組むこともできます。

活動内容から、「②トラブル未然防止のスキル」と「③トラブル解決のスキル」は連続で取り扱う方がよいようです。

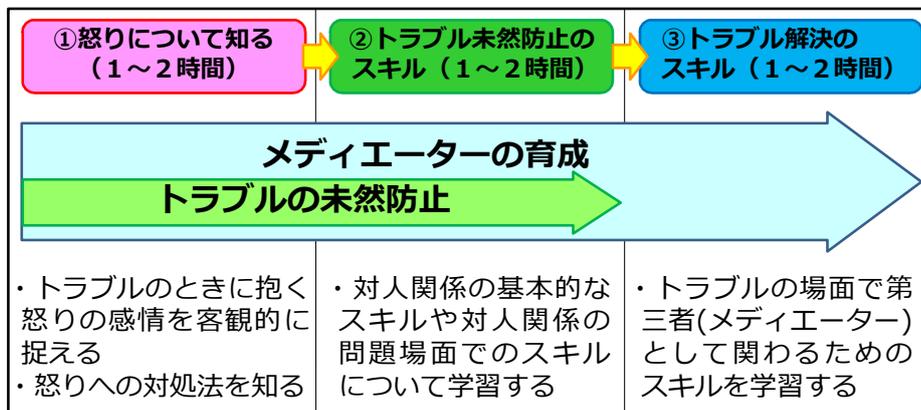


Q 2 活動プログラムは、最後の活動まで取り組まなければならないのですか？

A

活動プログラムは、最後の活動まで取り組むことが望ましいです。しかし、児童生徒の実態を考えて最後まで取り組むことが難しい場合も考えられます。

活動プログラムは、「①怒りについて知る」「②トラブル未然防止のスキル」「③トラブル解決のスキル」で構成しています。①②③の順に活動することでメディエーターの育成を目指していますが、児童生徒の実態に応じて、①②まで活動してトラブルの未然防止を目指すこともできます。



Q 3 活動プログラムは、他の校種の内容を取り組んでもよいですか？

A

児童生徒の実態に応じて、取り組みやすい校種の展開案で授業を行うことができます。例えば高等学校で、「①怒りについて知る」の学習の後、中学校の「①怒りについて知る」で怒りのコントロールの仕方について授業を行うことも考えられます。また、中学校の「②トラブル未然防止のスキル」の活動は1時間扱いとしていますが、2時間扱いの小学校の展開案を使って理解を深めさせることもできます。



Q 4 小学校の活動プログラムは、何年生から取り組むことができますか？

A

小学校の活動プログラムは、4年生以上での取り組みを想定して作成しています。平成26年度に実施した実態調査で怒りへの対処法の20項目のうち、小学校3年生では「親に話す」が最も多いのに対して、小学校5年生以上では「友達に話す」の方が多く、ピア・メディエーションの活動が有効であると考えました。また、小学校4年生の段階は自己中心的な考え方から第三者の立場に視点を移して物事を見ることができるようになる時期であると考えて、「③トラブル解決のスキル」で扱うピア・メディエーションの活動が可能であると判断しました。

	1	2	3
小学3年生	親に話す 53.3%	我慢する 49.9%	ゲームや音楽 44.8%
小学5年生	友達に話す 55.1%	ゲームや音楽 53.2%	我慢する 50.3%
中学2年生	友達に話す 67.7%	ゲームや音楽 65.9%	我慢する 60.8%
高校2年生	ゲームや音楽 74.5%	友達に話す 72.4%	我慢する 70.4%

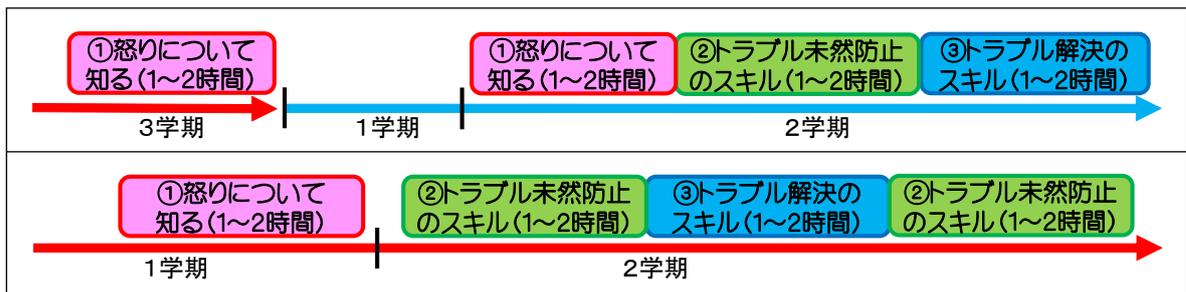


Q 5 活動プログラムの1つの活動を、繰り返し取り組んでもよいですか？

A

今回、活動プログラムの授業を行った学校の中には、「①怒りについて知る」の活動を前年度と今年度の2回行った学級があります。同じ授業を2回受けた生徒からは「同じ場面でも去年と怒りの感じ方が変わっていることに気付いた」、授業を行った先生からは「複数回行うことで生徒の自己理解が深まった」という感想が聞かれました。

また、「③トラブル解決のスキル」まで学習した児童生徒は、トラブル未然防止のスキルで学習した聴き方や話し方のスキルの大切さを感じています。この段階で再度「②トラブル未然防止のスキル」の学習を行うこともできます。さらに、「③トラブル解決のスキル」の活動を、場面を変えて複数回取り組むこともできます。

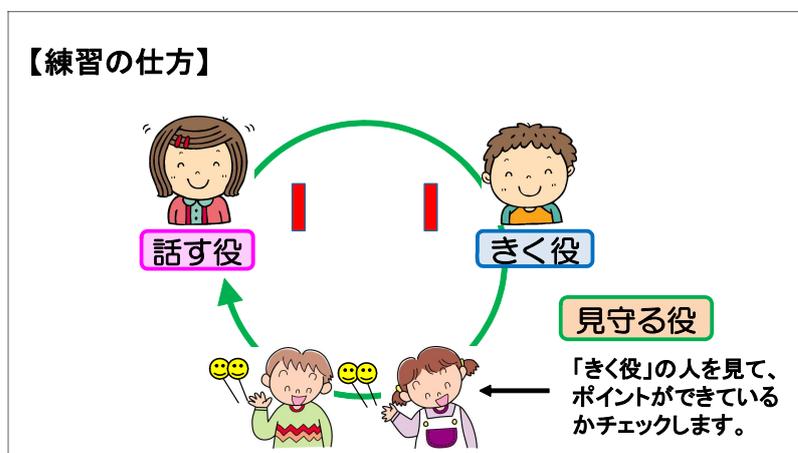


Q 6 活動プログラムは、グループ活動に慣れていない学級でもできますか？

A

活動プログラムは授業が進むにつれて、①個人で考えたことを発表して感じたことを述べ合う、②ペアで練習して感じたことを述べ合う、③3~4人で練習して感じたことを述べ合うというように、徐々に関わりを深めていくように計画しています。授業を行った先生方からは「活動プログラムの授業が進むにつれて、グループ活動での会話が増えて和やかになった」という感想も聞かれました。また、具体的なペアやグループでの活動の仕方を、展開案やスライドに示しています。

児童生徒の活動の様子を見ながら1時目から順に取り組むことで、無理なく活動プログラムの授業を進めることができると考えます。

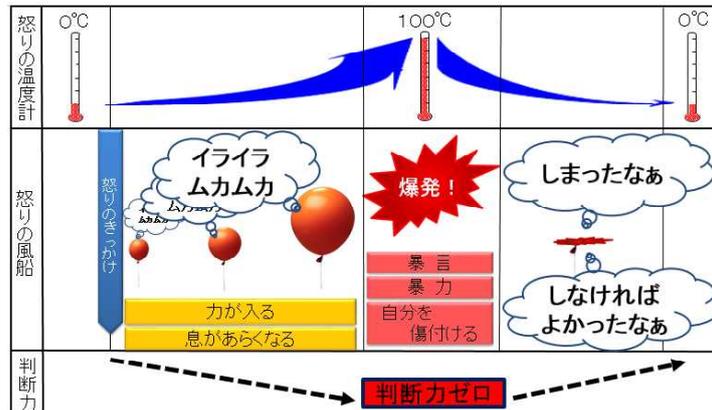


Q 7 活動プログラムの内容を、他の授業で取り扱うことができますか？

A

教科や領域の学習のねらいを達成するために、活動プログラムで学習した内容の一部を取り扱うこともできます。

小学校では、登場人物の心情を理解する場面で、怒りの風船や怒りの仕組みを想起させて理解を深めさせたという例があります。また、中学校では、保健体育（保健分野）のストレスの対処の学習の場面で、怒りの仕組みや怒りのコントロールの仕方のスライドを活用することも考えられます。



Q 8 活動プログラムの内容を、授業以外で取り扱うことができますか？

A

活動プログラムの授業は、児童生徒が自分も周りの人も傷付けられないような怒りへの対処法やトラブルにならない聴き方や話し方、友達同士のトラブルのときの声の掛け方を身に付けるための「きっかけ」になります。

授業を行った学級では、児童生徒同士や先生との間で、学習した内容について話題になることも多かったようです。先生方が授業をきっかけにして、朝の会や帰りの会などで意図的・継続的に学習した内容について話していただくことで、児童生徒のトラブル未然防止やトラブル解決への意識が高まり、トラブル未然防止やトラブル解決のための行動につながっていくと考えます。

また、児童会活動、生徒会活動において、「②トラブル未然防止のスキル」のモデリングの動画を見て、トラブルにならない聴き方や話し方について考える集会をもつこともできます。また、学年集会において「③トラブル解決のスキル」の動画を見た後に、学級に戻ってスキルのポイントに合う台詞を考えたり役割演技を行ったりする活動を行うこともできます。

さらに、個別に、児童生徒と一緒に怒りへの対処法について考えたり自分の怒りの感情について客観的に理解させたりするときに取り扱った例もあります。



Q9 活動プログラムに取り組むときに配慮することはありますか？

A

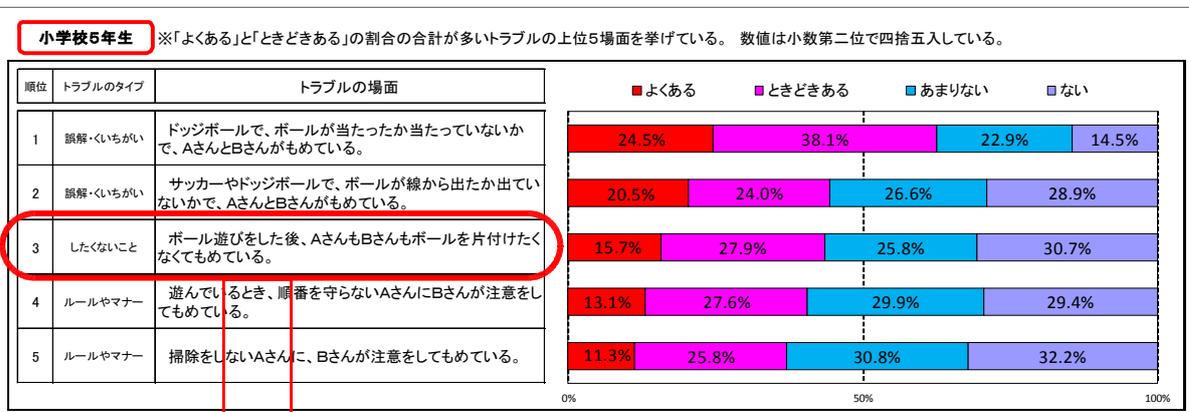
活動プログラムでは、児童生徒にとって身近なトラブルやトラブルが起きるときに抱く感情を扱うため、場合によっては個別に授業の前に活動の内容を知らせたり、授業の後に児童生徒の様子を観察したりしておく必要があります。また、児童生徒が安心してペアやグループでの活動を行ったり自分の意見や感想を言ったりすることができるように、事前に児童生徒の人間関係を考慮したメンバー編成を行っておく必要があります。さらに、学級通信などを用いて学習内容を家庭に知らせることで、家庭での子供の様子の見守りや話題にすることにつながり、より学習効果を高めることが期待できます。

Q10 活動プログラムで取り扱うトラブルの場面を変えてもよいですか？

A

活動プログラムの「②トラブル未然防止のスキル」「③トラブル解決のスキル」で取り扱ったトラブルの場面は、平成26年度に実施した実態調査の結果、児童生徒が身の回りでよく起きていると感じている場面を選んで設定しています。

実態調査に用いた「トラブルについてのアンケート」と集計ツール（Excel形式）は、トップページからダウンロードすることができます。学級や学年で「トラブルについてのアンケート」の実施と集計を行い、その結果を基に活動プログラムで取り扱う場面を選ぶことができます。その場合は、活動のねらいが明確になるように展開案を参考にし、指導資料を作成してください。



【場面設定の例】

小学校5年生の実態調査の結果、3位に挙げたトラブルの場面を、4時目の場面に設定して取り扱っています。

【話し方のポイント】

①やさしく話す

②はっきりと話す

A: どっちがかたづける？昨日も、ぼくがかたづけたよね。

B: うん。

A: 2回連続でかたづけるのはいやだから、

今日はかたづけてもらっていい？

③自分の気持ちを伝える

B: ぼくもかたづけるのいやだな。

A: じゃあ、今日はぼくがかたづけるから、

次は2回連続でかたづけてくれる？

④相手がなっとくするよう提案をする

B: うん、分かった。

A: ありがとう。